

領域健康の教育実態に関する研究

A Study on the Actual Health Education in Early Childhood Education Field

松澤 俊行

1. はじめに

筆者は、浜松学院大学短期大学部 2 年生対象の専門教育科目「健康（指導法）」を担当している。幼稚園教育要領の記載を見ても、幼児教育の 5 領域中「健康」は他の 4 領域以上に多様な活動を包み込む領域と受け取ることができる。健康に関わる活動は、浅く広く幼児教育全体を覆っていると言える。学生も臨地実習中は絶えず健康に関わる活動に携わっているはずである。しかし、それはあまりに当たり前のことであるため、意識に上らない場合も多々あると考えられる。

本研究では、実習直後に「健康（指導法）」の授業で与えた実習振り返り課題に対する学生の回答から、どのような活動が領域健康に関わるものとして意識されやすいかを分析する。実習中に意識され、印象に残る活動は、幼児教育の現場で工夫が施されている活動であり、学生が指導法を学ぶ意欲を持ちやすい活動であろう。そうした現場の実態の把握を通じて、効果的な授業の方法を検討することを本研究の目的としたい。

2. 研究の方法

本研究では、実習振り返り課題への学生の回答を分析し、数値の集計や記述内容の例示を行う。そして、数値や記述内容から読み取れるものについて考察する。「健康（指導法）」の授業は必修科目であるため、分析対象となったのは 2018 年度の全 2 年生 122 名分と、2019 年度の全 2 年生 127 名分との合計 249 名分の回答である。

2-1. 課題の内容

「健康（指導法）」の授業形態は演習であり、授業では毎回テーマに沿ったデータや事例の提示を行い、それらについての考察を求める。以下は、2018 年度、2019 年度の授業各回のテーマである。

- 第 1 回 領域「健康」の内容
- 第 2 回 手指の操作の発達
- 第 3 回 生活習慣の獲得
- 第 4 回 衛生的な生活習慣の形成

- 第 5 回 整理整頓、後片付け
- 第 6 回 災害時の行動
- 第 7 回 幼児期の食育、特に食事のマナーに関する教育
- 第 8 回 運動遊びの指導
- 第 9 回 実習の振り返り
- 第 10 回 健康に関する指導の事例紹介
- 第 11 回 傷や鼻血などの応急処置法
- 第 12 回 熱中症の症状と処置法
- 第 13 回 授業の復習と試験についての説明
- 第 14 回 事故への対応の事例紹介
- 第 15 回 実習後の課題の振り返り

両年度とも各回のテーマは、学生に公開されているシラバスの記述から多少の変更をしている。また、上記 15 回の授業の合間に学生は「教育実習」（幼稚園での 15 日間の実習）と「保育実習Ⅱ」（福祉施設での 12 日間の実習）を行うが、各実習前後の授業数がクラスにより異なるため、順序の変更をすることがある。例えば、「傷や鼻血などの応急処置」がテーマの授業を教育実習前に受けるクラスもあれば、同じテーマの授業を教育実習後に受けるクラスもある。また、2018 年度と 2019 年度でも授業の順序を少し変更した。そのような多少の違いはあるものの、「実習の振り返り」の授業を、教育実習後一週間以内の最初の時間に設定した点は、両年度全クラスで共通している。

「実習の振り返り」の授業の前半は、保育士経験のある絵本作家・中川李枝子のエッセイ（参考文献 1）を読み、解説した。授業の後半は、課題に取り組む時間とした。課題は、前半と異なる中川李枝子のエッセイ（参考文献 2）の読解と、実習の報告であった。以下、学生に配布した課題の説明文中、実習の報告に関する部分の説明である。

2 月～6 月の実習（自主実習、園でのボランティア経験なども含めて良い）で目にした「健康」に関わる活動の工夫や、保育者の配慮を記せ。複数挙げても良い。

領域健康の内容 10 項目の何番に当てはまるかも記入すること。

活動自体は普通でも、先生がしていた面白い言葉掛けなどがあったらそれを紹介しても良い。

活動の様子が目に浮かぶように、詳しく、具体的に記すこと。

（挙げた事例の内、特に印象的なものについては、今後の授業で紹介する予定である。）

「領域健康の内容 10 項目」を、幼稚園教育要領（参考文献 3）から引用する。この 10 項目は、上記の「何番に当てはまるか」の判断が行えるよう、学生の課題提出用紙にも記

載している。

- (1) 先生や友達と触れ合い、安定感をもって行動する。
- (2) いろいろな遊びの中で十分に体を動かす。
- (3) 進んで戸外で遊ぶ。
- (4) 様々な活動に親しみ、楽しんで取り組む。
- (5) 先生や友達と食べることを楽しみ、食べ物への興味や関心を持つ。
- (6) 健康な生活のリズムを身に付ける。
- (7) 身の回りを清潔にし、衣服の着脱、食事、排泄などの生活に必要な活動を自分でする。
- (8) 幼稚園における生活の仕方を知り、自分たちで生活の場を整えながら見通しをもって行動する。
- (9) 自分の健康に関心をもち、病気の予防などに必要な活動を進んで行う。
- (10) 危険な場所、危険な遊び方、災害時などの行動の仕方が分かり、安全に気を付けて行動する。

授業の後半 45 分に課題の記述の時間を設け、課題開始 30 分以降は記述が済んだ者から退室しても良いこととした。30 分で退室する者はほとんどなく、概ねどの学生も熱心に回答する様子が見られた。

2-2. 集計と報告の事例記載の方法

回答の分析に際しては、報告された事例の内容と共に、その事例が「領域健康の内容 10 項目の何番に当てはまるか」の申告に注目した。10 項目それぞれについて、申告した学生の数を集計すれば、どのような活動が領域健康に関わるものとして実習中の学生に意識されやすいかを数値で確認できる。そこから、幼児教育の現場では 10 項目中のどの活動に力が入れているかを窺い知ることもできると考えられる。

一つの活動に複数項目の要素が含まれる場合もあるので、複数の項目番号の申告を認めた。そして、それぞれの項目について申告をした学生の数と割合を集計した。原則的に回答者本人の申告を尊重したが、未記入の場合は筆者の判断で最適な番号を決定し、本人の申告に代えた。集計結果は 3-1 に示している。

3-2 では、報告された活動事例の中から代表的な事例を紹介している。事例の中には、多くの学生の参考になるであろう指導法が見受けられる。そうした事例は第 15 回の授業の題材として取り上げて、アイデアやヒントを共有した。その授業では「自分が実習した園以外での工夫を知ることができて考えの幅が広がった」「次の実習時や、就職した後に試してみたい」といった感想が学生から挙がり、課題の効果を再確認する機会にもなった。

3. 研究の結果

集計前に、以下の仮説を立てた。

- ・ 日常的に関心が向く内容ほど多くの活動があり、報告がある。
- ・ 幼児に早く身に付けて欲しい切実な内容ほど多くの活動があり、報告がある。

具体的には、遊びに関わる(2)(3)や食事に関わる(5)(7)などは目に付きやすく、多くの学生からの報告があるものと推測した。

以下、実際の集計結果を見てみる。

3-1. 集計結果

下が集計結果を示す表である。

表 領域健康に関わる活動の内容別申告数

2018年度 (学生 122 名)			2019年度 (学生 127 名)			2018年度・2019年度合計 (学生 249 名)		
内容	申告者	割合	内容	申告者	割合	内容	申告者	割合
(1)	26 人	21%	(1)	28 人	22%	(1)	54 人	22%
(2)	52 人	43%	(2)	45 人	35%	(2)	97 人	39%
(3)	35 人	29%	(3)	40 人	32%	(3)	75 人	31%
(4)	43 人	35%	(4)	33 人	26%	(4)	76 人	31%
(5)	34 人	28%	(5)	27 人	21%	(5)	61 人	25%
(6)	8 人	7%	(6)	15 人	12%	(6)	23 人	9%
(7)	29 人	24%	(7)	36 人	28%	(7)	65 人	26%
(8)	7 人	6%	(8)	11 人	9%	(8)	18 人	7%
(9)	27 人	22%	(9)	37 人	29%	(9)	64 人	26%
(10)	24 人	20%	(10)	11 人	9%	(10)	35 人	14%
合計	285 人	23%	合計	283 人	22%	合計	568 人	23%

2-2で示したように、一つの活動に複数項目の要素が含まれ、同じ学生から複数の番号が申告される場合もある。したがって、表の合計の欄に示された人数は実際の学生数を大きく上回ることとなる。「合計」の行の「割合」欄は、「申告者数の合計」を「学生数の10倍」(学生数に項目数を掛けた数)で割って求めた数字を記入している。これは10項目の割合を平均した値となる。

複数の事例を報告した学生もおり、その複数の事例で同じ番号を申告しているケースも見られた。その場合は同じ者1人の申告と見なせるので、申告者数を重複して数えてはいない。

一連の活動を局面ごとに細かく分けて複数事例のように報告している場合と、同じ一件の活動として報告している場合など様々なケースが見られた。統一的な判断が難しいため、事例の件数の集計は行わなかった。

3-2. 報告の事例

学生の報告から、幼稚園、保育所で実践されている健康に関わる活動の事例をいくつか紹介する。工夫に満ちたこれらの事例は、2-2に示したように最終回の授業の題材として用いている。なお、授業で紹介する際は記述内容を省略し、ポイントを強調して伝えた。

報告1：領域健康の内容(1)(2)(4)(10)と申告された事例

大きく広げたダンボールや中に入れるようなダンボール、中をくぐるようなダンボールを用意して、絵を描いたりダンボールの中に入ったりくぐったりできるようにしていた。遊ぶときは裸足になり、クレヨンはこちらばらないように指定の場所から1本ずつ取っていくというようにしていた。

普段とは違う体の動きができるように、ダンボールをくぐるということでハイハイをし体を動かせるようにしたり、座って絵を描くのではなく、しゃがんだり立ったりして大きいダンボールを端から端までクレヨンで描くことで指先だけでなく体全体を動かせるようにしていた。裸足になることで、よりダンボールに触れられるようにするだけではなく、ハイハイした時に前の子の足が後ろの子に当たっても大きな怪我をしないようにすることも子どもたちに伝え、安全に楽しめるように配慮していた。

報告2：領域健康の内容(4)(6)(9)と申告された事例

歯科検診、内科検診を受ける前にこわがらないように「痛いことはしない」と伝える。歯科の時は「でもね、大きな口を開けてないと少し痛いかもしれないよ」と伝える。こうすれば痛くないことが分かるのでその通りにリラックスして受ける。体が元気でいられるようにたくさん動いて、食べて寝るということを伝える。うがいは年少児には「4回ぶくぶくしたらばい菌いなくなるよ」と分かりやすく伝える。

報告3：領域健康の内容(4)(7)と申告された事例

遊んだ後の片付けの時、ずっと遊んでいて片付けない子どもたちに「お片付けパトロール隊、出動お願いします！」と声をかけ、できたら「パトロール隊のみなさんのおかげできれいになりました！ありがとうございます！」と、次も片付けようと思えるような声かけをしていた。

「パトロール隊」ということで、全員がおまわりさんになりきり片付けをすることができた。

報告4：領域健康の内容(5)と申告された事例

普段は配膳が終わったら、そのままいただきますをして食事をしていました。だけど先生が子どもに食物のことについてもっと関心を持ってもらうように、食べる前に給食のメニューを言ったり、お味見給食係を当番制で行うようにしていました。

お味見給食係は、皆より先に一口食べてどういう味だったのか、甘かったのか、しょっぱかったのかなど感想を皆の前で発表し、食物について関心を持って皆も食べることが出来ていたので良かったなと思いました。

報告5：領域健康の内容(7)(9)と申告された事例

戸外遊びが終わった時や、給食の前など手を洗う時に、水だけで簡単に終わらせてしまう手洗いを「洗わなきゃ」と思うように手の平に専用のスタンプを押しそれが消えるまで子どもたちは時間をかけ、丁寧に洗っていました。

手洗いが苦手だったり、嫌いな子のために、スタンプを手の平に押すという楽しい作業が入り、押してもらいたくて並んでいる子もいて、押された子はインクが消えるまできれいに手を洗っていました。

授業では、上記の事例だけではなく30件から40件の事例を紹介した。事例に触れた学生からは、新たなアイデアやヒントを得て次の実習や就職後の仕事への意欲が湧く様子が感じられた。

4. 考察

学生が報告する事例には、健康の内容(2)(3)として意識されるもの、つまりは遊びに関するものが多かった。2年度合計の申告者数は、(2)が最も多く、次いで(3)が多い。「様々な活動に楽しんで取り組む」という、遊びへつなげて解釈されそうな文言の(4)がその2項目に続く。その3つに清潔な生活習慣に関わる(7)、病気の予防に関わる(9)を加えた5つが全体の25%を超える数の学生から報告があった項目である。

食事に関わる(5)は2年合計の申告者数では上位半分に入る項目ではなかった。そして、生活のリズムに関わる(6)、生活の場を整える行動に関わる(8)、安全管理に関わる(10)の申告者数は少なかった。申告者数が多い項目と少ない項目との間には人数の上で大差がある。

こうした結果から、どのような活動が学生の印象に残るかはある程度実践の量(回数や時間)に左右される、すなわち常に行われている指導ほど印象に残りやすいと言えそうな一方で、必ずしも印象度と実践量は比例の関係にあるわけではないとも考えられる。(6)(8)(10)といった項目は申告者数が少なかったが、園児が規則正しい生活を身に付けるための指導、整理整頓を適切に行うための指導、安全に行動するための指導などは、日常的に行われているはずである。「1.はじめに」で述べた「あまりに当たり前のことである

ため、意識に上らない」状況になっているのであろう。

学生の申告の適否も集計に影響する。例えば、3-2中の報告3を、回答者は(4)(7)に当てはまる活動と申告しているが、(8)に当てはまる活動ととらえても差し支えない。こうした申告の漏れが申告者数の差につながっている可能性も考えられる。

数字の大小はあるものの、全ての項目について一定数の報告があったのも事実である。幼児教育の現場では領域健康の内容10項目全てについて地道で着実な指導が行われていることは確かだろう。その内、学生から多くの報告が挙がる項目が、保育者にとって独自の工夫を加えた指導をしやすく学生の関心が向かいやすい項目であることも間違いではないだろう。

以上の分析から、「健康（指導法）」の授業の効果を高めるための、以下のような改善案が考えられる。

- ・領域健康の内容10項目について、各項目の指導の実践例を、項目番号も記載して提示する。
- ・項目番号の記載がない指導の実践例を提示し、それぞれがどの項目に当てはまるかの判断を求める。
- ・10項目それぞれについての指導が行われていることを、実習でも確認してくるよう促す。
- ・実習後に2018年度、2019年度と同様の課題を行う。

（課題実施後、その回答を題材にした振り返りも2018年度、2019年度と同様に行う。）

このような授業は、幼稚園教育要領の領域健康の内容10項目をより詳しく理解することにつながると思われる。その理解が、幼児教育の現場では各項目に沿った指導が日々実践されていると気付く力を高め、実践の中に散りばめられた工夫を見抜く感性を磨くことも期待できる。

課題の回答時にあらためて幼稚園教育要領に目を通して、「ここに記述されていることを頭に入れて子どもと接する必要があると再認識した」との感想を漏らす学生は多い。幼稚園教育要領の精神を常に念頭に置きつつ、実践をシミュレーションできる授業を構成していきたい。

5. おわりに

本研究を通じて、効果的な「健康（指導法）」の授業の方法について再考した。学生の実践力、指導力向上に寄与する授業構成の一案を提示できたと思われる。

本研究では、学生が記した事例の報告に着目して分析を行ったが、その集計の方法などに課題が残った。「4. 考察」で示したように、学生による番号の申告が必ずしも適切ではない場合もある。学生の申告に頼らず、筆者が番号の判断を行う方法もありえた。学生の申告と筆者の判断を比較して、どのような誤解が起りやすいかを検証しつつ、再度集計してみる必要があるかもしれない。

単純集計以外の集計により新たな発見が行える可能性もある。例えば、ある事例が領域健康の内容中複数の項目に当てはまると申告された場合、どの項目とどの項目の組み合わせが多いかを確認してみると、一定の傾向が見えてくるのではないかと。

領域健康の教育実態と、その実態を見て学生が何を思うかについて、筆者が把握していることはまだまだ少ない。学生により多くの教訓を伝え、学生からより多くのものを引き出すためにも、引き続き研究を進めたい。

付記

浜松学院大学短期大学部の学生が真剣に実習と授業に取り組んでいるからこそ、本研究をこのような形で発表できる運びとなった。学生たちに感謝の意を表したい。

参考文献

- 1 中川李枝子『ママ、もっと自信をもって』, 日経 BP 社, 2016
- 2 中川李枝子『子どもはみんな問題児』, 新潮社, 2015
- 3 幼稚園教育要領 (文部科学省 平成 29 年 3 月告示)